



野生化ミンク

野村 梧郎

野生化ミンクの先祖

ミンクはイタチ科の獣で、北アメリカに住むアメリカミンクと、ヨーロッパに住むヨーロッパミンクの二種類に別れている。

アメリカミンクは養殖種として利用され、その一方で野生のものの毛皮も市場に出回り、それなりの評価を現在でも得ているが、アメリカミンクより小型なヨーロッパミンクは生息数も減り、毛皮資源と考えられないほどになっているらしい。

一九八三年三月十四日の朝日新聞に、「国後はミンクの天国」という記事がのっていた。内容は、アメリカミンクが欧州大陸に持ち込まれたため、ヨーロッパミンクが駆逐され絶滅する恐れが生じたので一年半前、ヨーロッパミンクを二五頭、国後島に移したのが成功したというものだった。十数行の小さな記事だったが、ヨーロッパミンクとアメリカミンクの間接的関係に示しているものと思っただ。

ヨーロッパでもミンクの養殖は盛んに行われているので、養殖場から脱走するものもいるはずだ。このミンクが逃げ込む環境には、

ヨーロッパミンクが住んでいる。同じ環境に生態が似た動物が住むことになる争いがおき、体格の違いが競争力の差につながり、その結果、先住者が侵入者に追われてしまう。日本各地でホンドイタチがチヨウセンイタチに追われているのと良く似た現象が、ヨーロッパミンクの原産地でおきていることを、この記事は示していることになる。

アメリカミンクは、内陸の湧水地や小川から海岸の干潟までの水場に生息し、魚や水鳥のひな、それに小型の哺乳類を餌にしている。獲物を捕えるためには、水中での活動をいとうことはできない。そのため適応が、この獣に良質な毛皮をもたらし、それがもて人間に狙われることになるという、因果関係が成立している。

野生化のチャンス

ミンクは仔獣のときから飼うと人にも良く馴れる。この性質を利用して、カナダで飼われるようになってから百年ほどたつが、今から五十年ほど前、アメリカの養殖場でシルバーブルーの毛色のものが生まれた。

突然変異の産物であるこのミンクを、もとの茶褐色のものに交配

して新しい毛色のものを作り、さらにそれから新しい色のものを開発する、といった方法で改良が進められてきている。このように養殖ミンクは、突然変異で生まれたものが品種改良の基礎になっているため、ミューテーションミンクとも言われている。

ミンクの性質のひとつとして、籠の中の生活を数十代も重ねさせられていながら、機会があれば簡単に野生化してしまうことをあげることができる。養殖場でのミンクは原則として一頭ずつ、母子それに兄弟は、成長段階に応じて、数頭一緒に籠に入れられている。この籠を数百も並べた建物が何棟も建っているのが飼育場の情景だ。畜産関係統計によると、一九八二年に道内で六八万頭のミンクが飼育されていたことになっている。

すばしこい獣をこれだけ飼っているのだから、取扱いのミスを付いたり、人間が見落としている籠のいたみを利用したりして、逃げだすものがないと思慮でない。ミンクにとっては都合良く、飼育舎には壁がない。外気に直接触れさせることで毛質を良くしようとの配慮から、吹抜けになっているためなのだが、このため籠を抜けたミンクは、すぐ外に出られるようになっていく。

籠抜けしたミンクは例外なく、最も近い水場に向って逃げるそうだ。本能のままに行動する結果なのだろうか、環境に適応して生きる動物の生命力の強さ、といったことまでも感じさせられる話でもある。

野生化ミンクとカワウソ情報

野生化したミンクは黒褐色のものがほとんどで、その他の色のものは珍しくなっている。黒褐色のものの方が野外で生活しやすいことに、毛色の先祖返りが加わった結果とあって良いだろう。

水場に出没するイタチ型の獣、泳ぎがうまく色は黒褐色。ミンクが野性化していることが知られていなかったところに、これだけの

条件をそろえた獣が現われたのだから、野生化ミンクを初めて見たほとんどの人が、カワウソが出たと思ってしまった。このため、確認できたのはみなミンクだったというカワウソ情報が、しきりにもたらされるようになってから十数年たつ。

カワウソだという誤報を流しながら分布を広げてきたミンクは、ほぼ道内全域に住みついてしまったものと思つて良い。ミンクの餌は野生動物がほとんどで、主な餌場は水中という条件も重なるためミンクによる被害ははつきりしないものが多いが、山荘の池のキンギョが全滅したとか、本格的な養殖もともくろんで飼いだした錦鯉がやられた、などという話を何度か聞かされている。

野幌森林公園内の「大沢の池」はかんがい用の溜池だが、増水時には水浸しになるヤナギのブッシュが広い面積を占めている環境を利用して繁殖する鳥が多く、カイツブリ・バン・カモ類などのひなを見る事ができた。

この大沢の池で、一度だけミンクらしい黒い獣を見たことがある。水に浸ったヤナギの陰に隠れたオシドリひなの群れを見送って間もなく現われたその獣は岸伝いにオシドリたちが姿を消したほうに行つた。その後、激しい水音と親鳥の警戒声を聞いた。一九七七年のことだったが、その後、大沢の池の水鳥のひなは少なくなるばかりで、今ではほとんど見られなくなった。犯人はミンクと思つているが、確証はない。

野生化ミンクとイタチ

ミンクが姿を現わすと、それまで住んでいたイタチがいなくなると言われている。実例もいくつか聞かされている。ほぼ定説になりかけているこの話は、ミンクはイタチより強い動物なので、野生化したミンクが増えるとイタチが圧迫され、しまいには生き残ることさえあぶなくなる、という方向に発展する。

このことで、野生化ミンクを写したNHKの「自然のアルバム」は、興味深い情景を写し出していた。真冬の釧路湿原を流れる川、その岸の水のひさしの下にミンクが現われた。

野生化ミンクには珍しい白色で、小ぶりなことから雌らしいと説明されたそのミンクは、水に入って水底で冬眠していたカエルを捕えて現われた。ところがなんとなくしゅんじゅんしていて、すぐ岸に戻ろうとしない。

次に画面に写し出されたのは、先ほどまで白ミンクがいたひさし状になった水の下に頑張っているイタチだった。白ミンクの獲物を狙っているのだという説明に続いて、根拠地に戻るのをあきらめて川を泳ぎ去る白ミンクが写された。

そのとき見た、自信たっぷりイタチと臆病さ丸出しのミンクの態度を思い出すと、イタチがミンクに圧迫されて暮しているとはとても考えられない。このことと、ミンクが姿を現わすとイタチがいなくなるという事実とを考え合わせると、この両種の生存競争には、闘争力以外の問題も加わっていることがわかる。

ミンクがいなくときのイタチの生息圏には、ミンクのほうが生活力を発揮しやすいところもふくまれていた。その場所でミンクとの競合が始まると、どちらのほうが暮しやすいかということで、イタチのほうが押し負けを食ってしまう。そんな場所でミンクが現われると、イタチが姿を消すことになっているのであるまいか。

野生化ミンクと餌動物

野幌森林公園内の「大沢の池」で、水鳥のひなを見るのができなくなった原因をミンクによるものとし、この被害はミンクの増殖につれて拡大して行くものとする、道内で繁殖する水鳥は絶滅してしまう。という考えも成り立つ。しかし野生化ミンクの原因は、ある北アメリカで繁殖する野鳥は多く、この地域の小動物たちは、

ミンクに狙われながら生活しており、長い種族の歴史の間に天敵と餌動物の間の平衡関係を作りあげている。

天敵がどれほど暴威をふるうとしても、餌動物を食い尽してはいけない。どのような形であっても、餌動物が生き残り子孫を増やせるようにしておかないと、天敵の子孫が飢え種族が危機にさらされることになってしまう。地域により年によって増減があっても、長期的には天敵と餌動物の間に平衡関係が成り立っていないければならぬ。

この前提条件をおいて考えると、ミンクのためにかつての姿を失った道内の水鳥の繁殖地も、やがてミンクの圧力に耐える方法を学んだ水鳥たちで、そのおもかげを取り戻すことがあり、それが自然界のあるべき姿という主張もなりたつ。だが、ここで問題にしなければならぬのは、すべての動物が原産地では天敵との間に、長い種族の歴史を経てきているということだ。その土地に生存している天敵に対する対策は、本能となって身につけている。ところが本道の水鳥たちのように、いきなりミンクのような天敵に狙われることになっては、とまどい混乱するばかりで手だてのほどこしようがない、というのが現状だろう。

養魚場などの被害、水鳥のひなたちが受けている圧迫といったことを考えると、たかがミンクということ、この小猛獣をほっておくわけにはいかないような気がする。根絶は無理だとしても、有効な手段をこらうじて生息数を減らし、餌動物への圧力をゆるめることが、北アメリカだけに住んでいなければならない動物を、本道の自然に持ち込んだ人間の責任ではあるまいか。